

|||||
書 評
|||||

Karen Farrington

Atlas Historique des Grandes

St. André des Arts Date de parution (2006) 190P.

本書『アトラス—探検の歴史—』は大航海時代後、特に1600～1700年代を中心とする探検記録をめぐる歴史アトラスである。副題に「ヴァイキングによるアメリカの発見から南極への最新の科学的探究へ」とあるように、アメリカ大陸だけでなく、両極地方の発見も紹介されている。もちろん、ヨーロッパから陸続きであったアジアへの探検についても、先に記されている。

まず要旨が記載され、それに続く本書の構成は以下の通りである。ペルシア東征出発年にあたる紀元前334年頃の「最初の遠征」から始まり、大航海時代の「1600年以前の探検記」が続く。その後は、大陸内陸部へと踏み入る「1600年以後のアジアへの探検」・「1600年以後のアフリカ」・「1600年以後のアメリカ」へと展開し、そして最後には「北極と南極」・「オーストラレーシア」が紹介されている。

実質的な第1章にあたる「最初の遠征」は、古代エジプトの探検家、アレキサンダー大王、絹の道、ストラボンとローマ人、探検家とイスラム教、ヴァイキングの6項目からなる。第2章の「1600年以前の探検記」では十字軍、マルコ・ポーロ、フランシスコ・ピサロやイエズス会宣教師など8人（グループ）が記されている。

第3章のアジアではマテオ・リッチ、ヴィ

トゥス・ベーリングやナイン・シン・ラワット、など9人が紹介されている。続くアフリカではジェームス・ブルース、ムンゴ・パークやヨハン・ルートヴィヒ・ブルクハルトなど14人の記述がある。さらに、アメリカではルイ・ジョリエやシャルル＝マリー・ド・ラ・コンダミーヌなど15人、両極ではジョン・フランクリンやアドルフ・エリク・ノルデンショルドなど12名、そしてオーストラレーシアではアベル・ヤンス・タスマンやアントワーン・ブリュニー・ダントルカスターなど10人の探検記が続く。

各章の冒頭では、探検家の踏査したルートが色分けして描かれている。そのため、時代を経てより内陸部、高緯度や乾燥気候帯などの困難な地域へ足が踏み入れられたことが理解しやすくなっている。それに続いて、各項目ごとに4～6頁ずつ、それぞれの探検家の業績が記されている。そこには各人の肖像画や、彼らの詳細な探検ルートが添えられている。また、探検時の様子が描かれた絵画や彼らが描いた地図、上陸時や原住民との遭遇など、興味深い資料も多く載せられている。これらの編集上の工夫は、読者の理解に役立つ。

そのなかで評者が特に注目したのは、第4章「1600年以前のアメリカ」において紹介されているカナダへの2人の探検家である。最初の1人は、アレクサンダー・マッケンジー

(Alexander MacKenzie) である。スコットランドで生まれた彼は、1774年にニューヨークへ渡り、1776年にカナダ・モントリオールへ移った。カナダ開拓に大きく関わった毛皮貿易会社であるハドソン湾会社のライバルであった北西会社 (North West Company) に入社した彼は、1789年にカナダ北部から北極海に流れる大河を発見した。それは、後に発見者の名前になみマッケンジー川と名付けられた。その後、1793年に彼は西部を横断し、太平洋へ注ぐフレーザー川の源流を発見した。やがて19世紀になると、この大河沿いには金鉱が発見され、20世紀にかけて河口では遡上するサケを材料とする缶詰工場が連立した。前者には中国、そして後者には日本から多くの移民が労働者として従事したのである。

もう1人の探検家は1757年イギリスのキングズリンに生まれたジョージ・バンクーバー (George Vancouver) である。北海に望むイングランドの生誕地は、中世ではリヴァプールと並ぶ重要港であった。ここに生まれた彼は13歳で海軍に入り、J. クックの2回目 (1772～75)・3回目 (76～79) の航海に参加した。1791年、北アメリカ北西海岸への探検隊の隊長に任命された彼は、アフリカ大陸最南端の喜望峯経由でオーストラリア、ニュージーランドとタヒチからハワイに着いた。その後、北アメリカ北西岸に進んだ彼は、現在のバンクーバー周辺を詳細に調査した。バンクーバー島およびバンクーバー市は、探検家の彼にちなんで命名されたものである。1793・94年にも北西カナダを踏査した彼は、1798年に40歳で亡くなった。

なお、彼の友人の名前がつけられたバラード入江にはバンクーバー海洋博物館があり、



第1図 トフィーノ沖のクレヨコット島—1920年頃— (河原編著、2013)

彼が利用したディスカバリー号の模型が展示されている。また、ビクトリア州会議事堂の上部にはジョージ・バンクーバー像が設置されている。それを望むホテル前の道路にも、彼の銅像が建つ。

バンクーバー島西岸には彼が発見し、その後北西太平洋航路の寄港地となった集落も少なくない。それらのなかには、トフィーノ (第1図) やバムフィールドのように、20世紀初頭における日本人の海獣漁の寄港地や、フレーザー川河口に位置する日本人漁業者の集住地・スティープストーンからの日本人漁業移住者によって発達した集落もある。新たに発見された漁場がかつて繁栄した寄港地に近接していると、使われなくなった住宅の一部は日本人の新居になったのである。

2005年8月、評者は北西太平洋航路の寄港地であり、ケーブル通信基地 (現在は海洋研究センター) でもあったバムフィールドを調査した (第2図)。第二次大戦以前、ここには日本人10世帯が住んでいた。現在では多くの人々がヨットやプレジャーボートで来訪し、バカンスを楽しんでいた。評者は、3時間以上も未舗装の砂利道をレンタカーで走らせた。陸路で訪問した評者に驚くばかりの彼



第2図 バムフィールドのケーブル通信基地—1920年頃— (河原編著、2013)

らとの会話から、まさにここへの交通手段は海路であると認識し、カナダ北西岸の開拓をめぐる A. マッケンジーと G. バンクーバーの

偉業と功績に、改めて思いを馳せたのである。このように、本書は近代以前の探検史、そしてその後の移民史をつなぐ好書といえよう。

(立命館大学文学部 河原典史 記)

参考文献

- Akrigg, G. P. V. and Akrigg, H. B.: *British Columbia Place Names*, UBC Press, 1986, pp.13・47-48・269.
河原典史「カナダ・バンクーバー島西岸への日本人漁業者の二次移住—クレヨット・トフィーノ・バムフィールドを中心に—」、(米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動—在外日本人・移民の近現代史—』、人文書院、2007、所収)、147-171 頁。
河原典史編著『カナダ日本人漁業移民の見た風景—前川家「古写真」コレクション—』、三人社、2013、37-38 頁。